

# 芸術系学生のための海外研修のありかた

ニュージーランド、ユニテック工科大学視察報告を兼ねて  
The Value of an Overseas Study Program for Art Students:  
Viewpoints from the Inspection of UNITEC in New Zealand

- 深谷公宣／富山大学芸術文化学部、小川太郎／富山大学芸術文化学部  
FUKAYA Kiminori / Faculty of Art and Design, University of Toyama  
OGAWA Taro / Faculty of Art and Design, University of Toyama
- Key Words: 国際交流、英語教育、派遣留学、語学研修、ニュージーランド

## 1. 視察の経緯と目的

平成25年10月、富山大学国際交流センターが発足し、全学的な国際交流事業の推進体制が整備された。主たる事業として、センターは海外交流協定及び短期派遣留学（語学研修）制度（以下、語学研修）の拡充に着手した。

平成26年現在、本学は3つの語学研修を実施している。米ケンタッキー州のマーレイ州立大学、ハワイ大学マウイ校、ニュージーランドのユニテック工科大学（以下、ユニテック）である。前2者は五福キャンパスの複数の部局が、後者は杉谷キャンパス教養教育言語系教員グループが企画・立案し、毎年実施してきた。<sup>\*1</sup>平成26年度研修の実施時期はいずれも平成27年2～3月で、日程と費用は以下のとおりである（平成26年11月現在）。

- ・マーレイ州立大学  
日程：平成27年2月11日（水）～3月15日（日）  
費用：約53万円
- ・ハワイ大学マウイ校  
日程：平成27年3月15日（日）～4月4日（土）  
費用：約40万円
- ・ユニテック工科大学  
日程：平成27年2月28日（土）～3月28日（土）  
費用：約52万円

芸術文化学部では、過去に学生がマーレイ州立大学の語学研修に参加した実績がある。ただし学部としての組織的な関与は無く、あくまで学生個人の自主的な参加に留まっていた。ところが国際交流センター発足後、交流事業拡充の視点から本学部にも組織的な関与が求められることとなり、平成26年1月16日、国際交流センター長から本学部に対して今後の語学研修プログラムへの関与を見据えた現・研修先の視察依頼が出された。視察先は、芸術系の教育組織を持つユニテックである。

これに伴い、派遣教員として小川・深谷の2名が選定された。本学部からは視察の目的として、ユニテックが（1）英語の語学研修先として相応しい環境か、（2）語学研修以外の研修先として研修を行うのに適している

か、についての調査を託された。

事前打ち合わせのため、上記（1）（2）に基づいた具体的な視察希望項目を小川、深谷両名でとりまとめ、1月22日に電子メールで深谷から国際交流センターにユニテックとの調整を依頼した。項目は以下の3点である。

- (a) ユニテック言語学科責任者との会合。（内容は「芸術系学生を対象とした研修プログラムの実施可能性」について）
- (b) 教育現場見学。見学希望先として、建築学科、景観建築学科、デザイン・視覚芸術学科、舞台・映像芸術学科、建築技術学科（特に家具・キャビネット制作）
- (c) 英語の授業見学

しかし国際交流センターによるその後の調整は滞り、こちらの希望をユニテックに伝えた旨の連絡はあったものの、結局会合日程や見学先の確定が出来ないまま渡航日を迎えることとなった。このため、会合時間や見学先の調整は最終的に小川、深谷が現地で行わなければならないという問題が生じた（第6節で後述）。こうした経緯から、学部からの依頼事項（2）、またそれに基づく項目（b）については今回、授業や学習環境の視察がほとんどできなかった。よって以下に述べるのは主として（1）の調査についての報告とそれに基づく考察である。

## 2. 日程

調査旅行期間は2014（平成26）年3月13日（木）から3月19日（水）の1週間であった。

3月13日（木）  
午後、成田国際空港発。

3月14日（金）  
午前、ニュージーランド、オークランド国際空港着。  
午後、ユニテック、マウント・アルバート・キャンパス訪問。ユニテック側関係者との面会時間が不確定であったため、その確認も兼ね、言語学科（Department

of Language Studies) の受付へ。事務職員を介し、急遽言語学科プログラム・リーダー、カースティ・ウィリアムソン(Kirsty Williamson)氏との面会が設定される。ユニテックの英語教育制度や使用教材について説明を受け、意見交換。

また、富山大学からの研修参加学生が出席する授業を参観。その後、キャンパスを案内される。学生生活の中心となる広場であるHUB(ハブ)や、図書館の言語学習設備を見学。

3月15日(土)

オークランド博物館訪問。マオリ族の遺した工芸品、建造物や、パフォーマンスを見学。

3月16日(日)

オークランド・シティ・アートギャラリー訪問。近現代の絵画、彫刻等を中心に見学。

3月17日(月)

午前10時にユニテックへ。国際交流事務所(International Office)にて、国際マーケティング・マネジャー、ヴィヴィエン・キングスベリー(Vivienne Kingsbury)氏及び「デザイン・視覚芸術学科(Design and Visual Arts)」の教員1名と面会。ユニテックの学年制・学期制や、同学科の教育システム(学位を得るための教育課程等)について説明を受け、意見交換。

その後、ユニテックが雇用する国際コーディネーター、ティナ・アンジェローヴァ(Tina Angelova)氏と面会。ホームステイのマッチングや、富山大学が独自に依頼している研修プログラム(学生の専門分野に見合った施設訪問、講義等)の調整に関する説明を受け、意見交換。

続いて、言語学科長ニック・シャックルフォード(Nick Shackelford)氏と面会。芸術文化学部の学生が研修に参加した場合のプログラムのあり方等について協議。

午後、言語学科長の計らいにより授業見学。その後、キャンパスを散策し14日に見られなかった施設等を見学。

3月18日(火)

正午、シャックルフォード言語学科長と会食。異文化環境のなかで英語を学ぶ意義等について協議。

夜、オークランド国際空港発。

3月19日(水)

成田国際空港着。

### 3. 訪問先国の概要

ニュージーランドは、オセアニア地区ポリネシアに位置し、島国で火山、温泉、地震、四季があるなど、日本との類似点が多い。国土面積約267,800平方キロメートルと北海道を除いた日本の面積に等しい土地に、僅か452万人強の人口を有する人口密度が極めて低い国である。<sup>1)</sup> オーストラリアからの距離は2,000キロ以上で、主に国土は東北～南西に伸びる2つの大きな島により形成されており、首都は南島にあるウェリントン。日本との時差は+4時間で、一年を通して激しい気温の変化も無くとても穏やかである。<sup>2)</sup>

本学学生が研修を行う3月は夏の盛りが落ち着いた頃にあたり、最高気温も平均で20℃強と過ごし易い。本学の学生にとっては、体力的にも負荷が少なく勉学に専念出来る自然環境である。ただ今回の訪問中(週末)に、巨大サイクロンがニュージーランド北島を直撃し、穏やかなだけではない一面も垣間見た。

ユニテック(マウント・アルバート・キャンパス)のあるオークランドは北島の北方に細長く突き出たオークランド半島の付け根に位置する人口40万人、国内最大の都市である。(同じアメリカのオークランドとは発音、綴りが異なる。)多様な民族が共存し、治安は比較的良く、とてもリラックスした雰囲気包まれている。だが先進国の首都などと比較しても物価は高い。

学校周辺の環境については4.3に詳しく記す。

### 4. 視察教育機関——ユニテック工科大学について

ユニテックは総合大学ではなく工科大学であり、専門的職業人育成を重視した教育が特徴である。ただしニュージーランドでは大学、工科大学、ポリテクニクを含めた高等教育機関で授与される資格の基準が統一されており、工科大学でも認定証(Certificate)レベルから博士の学位(Doctoral Degree)まで、大学と同等の資格を受けることができる。<sup>\*2</sup>

ユニテックは工科大学としてはニュージーランド最大で、2014年現在、80カ国23,000人の学生が学んでいる。3つのキャンパスがあり、語学研修が行われる言語学科はマウント・アルバート・キャンパスに位置する。14,000人以上の学生が学ぶユニテック最大のキャンパスである。

#### 4.1 施設

本学学生が学習することになるマウント・アルバート・キャンパスはオークランドの郊外に位置し市内中心部からの直線距離で7キロ程度、電車、バスだと40～50分程かかる。実際、学生は郊外にホームステイするケースが多いため、通学に要する時間は様々なようだ。



図1 マウント・アルバート・キャンパス外観



図2 図書館の言語学習設備

キャンパスは広大であるが、言語学科は多くの共有施設が集まるHUBと呼ばれる区画に隣接しており、利便性が高い。

HUBはカフェテリア、学務窓口、図書館、本屋、床屋、留学生相談窓口、売店、薬局、コンピュータ室、学生会本部、娯楽施設などが集まった一画であり、そこにあるカフェテリアの名称でもある。

学生窓口は親切な個別対応をしており、利用し易い施設であったように思う。床屋は市内の理容学校の研修を兼ねており、安価である。本屋は必要なテキストと画材などが売っているだけで本学の売店より遥かに広いものの極めて質素である。

その他、電子レンジやポットが備え付けられた簡単な調理室も用意されていた。

図書館には、言語学習設備がありテキストなどの開架図書や視聴覚教材も多く充実していた。

また、学生が企画するイベントなども、HUBの広場でおこなわれるようだ。今回の訪問機会中にはクラフトフェアがおこなわれていた。フェアの中ではマオリの伝統的な工芸品が印象的だった。マオリ学の先生がウッドカーヴィングの実演をされていたり、亜麻の葉を織り上げたバッグを販売する学生などがいた。こうしたイベン

トは、参加学生には地域特有のマオリ文化に触れる機会となるだろう。

## 4.2 英語教育

ユニテックの英語教育は言語学科でおこなわれる。2014年に入ってカリキュラム改革が実施され、「ニュージーランド政府英語資格認定基準（New Zealand Certificates in English Language、通称NZCEL）」が採用されることとなった。これは達成レベルを1～5（レベル1は2段階あるので合計6段階）に分けるもので、「ヨーロッパ共通言語参照枠（Common European Framework of Reference for Languages、通称CEFR）」を参考に導入された全国共通の新基準である。<sup>\*3</sup> 私たちの訪問時は新基準に基づいたカリキュラム運用開始後最初の学期であり、教職員が対応に追われていた。

ユニテックの英語教育は上記資格基準のレベル2～レベル5に合わせておこなわれる（レベル1相当の教育は実施していない）。プリティッシュ・カウンシルが主導する英語能力試験アイエルツ（IELTS）のスコアに換算すると、レベル3＝IELTS 5.5、レベル4＝IELTS 6.0、レベル5＝IELTS 6.5に相当するという。<sup>3)</sup> アイエルツは英国文化圏への留学等に要求される英語の試験だが、公益財団法人日本英語検定協会によれば、ユニテックの「レベル4」に相当する6.0点は「有能なユーザー」（「不正確さ、不適切さ、および誤解がいくらか見られるものの、概して効果的に英語を駆使する能力を有している」と解釈されている。<sup>4)</sup> 日本に馴染み深い評価基準で言えば、6.0点は英検準1級程度、すなわち大学生が有しておくべき「標準」の英語力と考えてよい。本学の参加学生は例年、初日に実施されるクラス分けテスト（Placement Test）の成績によって大学生の標準に当たるレベル4を軸に、実力に合ったレベルに振り分けられるが、この点、無理のないクラス分けといえよう。クラス分け後、学生は通常の学期（regular semester）16週のうち、3週間、当該クラスに合流するかたちで授業を受けることとなる。

今回の視察では2つの授業を参観した。

1回目（3月14日）に参観した授業には本学学生が参加しており、次週に行われる試験を想定した演習がおこなわれていた。クラスサイズは10名ほどの少人数。演習内容は、ある文を別の構文を使って言い換える、パラフレーズの練習である。2人ずつペアを組み、予め用意された文章カードを用いて、ひとりが1文を発話し、もう1人がその文を別の構文にして言い換える。表現力の向上を意図していると思われる。本学の研修参加学生は、他の学生に比べてもペアワークの主旨をよく理解して演習に取り組んでいたようであった。パラフレーズに

はある程度の文法力が必要だが、当該学生の文法力が相対的に高かったのではないかという印象を持った。



図3 授業の様子

2回目（3月17日）に参観した授業では、使用教材に沿った授業が展開された。この日のトピックは“Good Design”であった。導入部で短い英文を参照した後に、関連する語彙の確認を行い、「良いデザインとは何か」について話し合う。ペアを組んで話し合った後、意見発表、という流れで活動は進んだ。悪いデザインの例として「戦争」という発言が聞かれるなど、日本の学生にはあまりない視点からの意見もあり、文化の違いによってデザインという語へのイメージが異なる様子が伺えた。そうした違いにより生まれる溝を、何度も意見を交わしながら埋めて行く作業は、英語によるコミュニケーション能力の向上にも繋がるであろう。授業はその後、文法へと重心を移し、“passive”（受動態）の解説と、知識定着のためのプリント演習がおこなわれた。

授業参観から感じたユニテックにおける英語教育の利点は、（1）少人数クラスで教員と学生のやり取りが活発になされるため、英語での発言の機会が多く与えられること、（2）アジア系、アフリカ系、ヨーロッパ系など、様々な地域の学生が受講しているため、文化的な差異を意識しながら英語を学べること、である。また、（3）使用する英語の水準が高くなく、芸術文化学部の学生が研修に参加した場合、英語が苦手な学生であっても、授業についていくのに大きな支障はないと思われる。

（2）について懸念があるとすれば、クラスメイトを含めオークランド全体に移民が多いため、英語の母語話者が教師やホームステイ先のホスト・ファミリーに限られ、ネイティブの英語に触れる機会が少ないことである。この点に関しては杉谷キャンパス言語系教員グループによる「平成19年度ユニテック語学研修実施報告書」でも言及されている。この報告書では、現在の英語の広がりや母語話者よりも第二言語としての英語、あるいは「変

種」英語の話者によって支えられているという視点に立ち、母語話者の少ないユニテックの環境を肯定的に捉えている。<sup>\*4</sup> 本稿の筆者兩名もこの考えに同意する。海外語学研修の意義は、英語を媒体として多様な文化的背景を持った人々と対話し、価値観を相対化しながら自分の意見を構築する契機がもたらされる点にある。これが結果として、英語表現能力の向上に繋がる。芸術文化学部の学生にとってみても、たとえ「変種」英語であれ、多様な文化的背景を持った人々との交流は好ましい。「芸術」は新たな価値の創造行為であり、「文化」はそうした創造行為を支える教養を意味する。海外での他者との交流を通して未知の価値観に触れ、新しい価値の創造のために教養を積み重ねることは、「芸術」に関与するうえで極めて重要である。語学研修はそうした経験をもたらす絶好の機会であり、なかでも先住民マオリ、アジア系を中心とした移民、太平洋島嶼系（トンガ、サモア、フィジー等）の「パシフィック・ピープルズ」、さらには世界各地からの留学生と英語で対話できるユニテックの環境は、本学部の学生にとって相応しいといえる。

#### 4.3 周辺環境

オークランドの街は坂が多く起伏にとんでおり、緑の豊かな公園が多い。植物も亜熱帯特有の巨大なシダや、固有種、大径木の松類、マングローブ、西洋の檜類など、我々が日常で目にするものと大きく異なり、興味が尽きない。

多国籍文化を構築している国の中でもニュージーランドは差別のような、負の文化的摩擦が非常に少ない国である。人種差別に関し、街で働く中国やインドからの移民に聞いても「特に差別は感じた事がない」との答えが返って来た。

公共性の高い掲示板はマオリ語と英語の併記になっているだけでなく、移民の中に非英語話者が居る事もあり、街では至る所にピクトグラムなどの分かり易い表示がある。様々な言語条件の人々とも情報共有が容易にはかれる仕組みが用意されている。

特に初めての海外体験をする学生たちにとって、自然豊かで、人種偏見や差別による精神的なストレスが少なくリラックスした環境で勉学に勤しむ事が出来るのは、かなりの好条件であろう。だがその反面、「西欧先進諸国」から最も離れている地域であり、イギリスなどで観られるような、多様な文化が絡まり、積み重なった「深み」を体験する事は難しいと思われる。

とは言うものの、もともとイギリスからの移民も多くさらに経済的にも文化的にもイギリスとの結びつきが強かったため、イギリス連邦加盟国でもあるニュージーランドの言語や生活様式などの、基本的な要素はとて英



図4 駅のホームに見られるピクトグラム

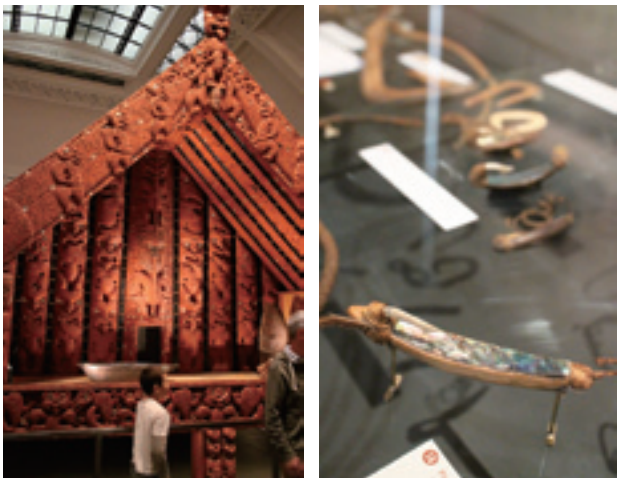


図5 オークランド博物館の収蔵品  
(左：マオリの集会場 右：伝統的な漁具)

国的である。

海外大手チェーン店などの出店が少なく抑えられており、独自の文化を守りながらも多国籍な文化と共存する様は、まさにキウイスタイル（リラックスした、何事も明るく捉えるニュージーランド特有の生活様式）と呼ぶにふさわしいのかもしれない。

オークランドには、国立の博物館とアートギャラリーがあり、ここでは世界の歴史や美術、ポリネシア固有の文化、生物、美術などが学べる。

オークランド博物館では、芸術、民族学、自然科学、戦争、歴史などがセクションごとに展示されている。中

でも印象に強く残ったのはマオリをはじめとするポリネシアの美的感覚が際立つ宝飾品、神具、道具類などだ。それらは、非常に躍動的でありながら、均整の取れた静けさをも持ち合わせた美しさがある。マオリ族による本格的な歌やハカ（戦の舞）の披露も含め、展示資料の質の高さと数量に圧倒される。



図6 オークランド博物館外観

ニュージーランドに人々が定住するのはポリネシア諸国の中でもかなり遅く（BC10世紀前後）、マルケサス諸島から折り返す様に移住してきたとされている。オーストラリアのアボリジニ美術とマオリのそれに共通点が少ないことにもうなずけた。

自然科学分野では自然災害や、地域特有の想像を超える大きさ、美しさをもつ動植物など固有種が展示されている。

戦争関連の展示はとても充実しており、地理的に孤立しているニュージーランドであっても現在まで西洋各国と共に多くの戦争に参加し、地球の裏側にまで派兵して来た事などが示されている。零式戦闘機（現存する唯一のオリジナル22型機）やスピットファイア戦闘機、V1ロケット、第二次世界大戦での日本降伏文書など世界でも希有で見応えのある収蔵品や資料が、善悪でなく過去



図7 オークランド・シティ・アートギャラリー

の傷として展示されている点が印象的であった。

アートギャラリーはヨーロッパを代表する作家の美術作品が時代やムーブメントごとに並べてあり、美術の歴史を一通り学べる構成になっているだけでなく、地元アーティスト達の活躍、世界との接点、マオリアートなども紹介しており、鑑賞し易い展示となっている。建築も19世紀に建造された古典的なビルに、近代的なエントランスが融合したもので、2013年度 World Building of the Yearを受賞している。<sup>5)</sup>

## 5. 交流事業

### 5.1 「ニュージーランド短期英語研修プログラム」

(平成18年度～)

ユニテックでの語学研修は「ニュージーランド短期英語研修プログラム」として、杉谷キャンパスの言語系教員グループが立案し、実施してきたものである。プログラムの開始は平成18(2006)年度である。クライスト・チャーチ大地震の影響で中止の回もあったが、平成25年度のプログラムで8回目を数える。企画・立案、先方との交渉、事前研修、引率、報告会の実施、報告書の作成等、仕事が多岐にわたるなかで、本プログラムは長きにわたって継続しており、杉谷キャンパス言語系教員の熱意が伺える。

本研修には平成25年度から、五福キャンパスの学生も参加している。平成26年度プログラムからは他の2つの語学研修とともに全学的に実施されることとなり、芸術文化学部も参加可能となった。

実施時期は毎年3月、期間は約1か月である。そのうち3週間は前述のとおり、ユニテックの正規の英語授業に富山大参加者が合流する。残りの1週間は、参加者の専門性や興味関心に沿った「富山大プログラム」の実施をユニテック側に独自に依頼している。例年、杉谷キャンパスの学生向けには「現地の医療機関、製薬会社への訪問」等のプログラムが用意される。平成25年度に参加した五福キャンパスの学生向けには「現地高校の日本語授業参加や日本に本社をもつ会社への訪問」が手配された。

これまでの経緯から、本プログラムは医薬系の趣きが強く芸術系学生の参加に不向きではないかとの懸念もある。しかし既述のとおり、国際交流センター発足による語学研修プログラムの全学的拡大、ニュージーランドという多民族国家・多文化環境のなかで生きた英語との接触が可能な研修環境を考慮すると、本学部の学生が参加してよい条件は揃っている。

そこで次節では、学生参加のために今後本学部が、この研修プログラムに具体的にどのように関わっていくべきかについて考察しておく。

### 5.2 芸術文化学部に対応しい海外研修のありかた

ユニテックの英語教育は「総合英語 (General English)」、「学術英語 (Academic English)」、「職場英語 (Workplace English)」に分けられる。本学の語学研修は総合英語が中心である。学内には、学生が将来大学院に進んで英語で論文を書くという視点から学術英語を推す声もあると聞く。しかし芸術文化学部の学生の場合、論文執筆につながる専門英語よりも、異文化環境下での他者との対話、視野の拡大、自己表現方法の習得といった点を重視すべきであり、研修期間の短さからいっても、総合英語を学ぶのが妥当であろう。

もっとも総合英語を学ぶ過程で、芸術に関する題材を扱う機会を増やせば、それに越したことはない。芸術文化学部の英語教育では、学生の動機付けや専門的な英語表現への関心を高める目的で、芸術関連の題材を多く使用している。研修先で芸術に関する題材を取り上げてもらえれば、本学部の英語教育と有機的な繋がりを持たせることができるのではないかと。そうした視点から、ユニテックの言語学科長、ニック・シャックルフォード氏と協議した。

芸術文化学部仕様の研修プログラムを組むことは可能か、との問いには、シャックルフォード氏から「特別仕様 (tailor made) のプログラム設計は可能であるが、英語のクラスが富山大の学生で固まってしまうと異文化交流にならず、英語学習としての効果も上がらない」との見解が示された。そのかわり、氏からは課外活動を利用した本学部学生独自のプログラムについて示唆があった。例えば、本学の語学研修がこれまでに行ってきた「3週間通常授業+1週間課外活動 (富山大プログラム)」のスケジュールを踏襲し、課外活動の内容を、芸術関連の施設訪問や専門家による特別講義等にすると案である。また、「週4日通常授業+1日課外活動」といったスケジュールの組み方があることについても示唆を受けた。ただしレベルによって授業の内容や進度が異なるため、富山大生のみ週1日課外活動に出かけるとレベルごとにフォローアップが必要となる等、課題もありそうである。

ユニテックが有する芸術系学科と連携した英語の課外活動の可能性はないか、という点についても協議した。シャックルフォード氏によればユニテックも日本同様、学科同士の横の繋がりが薄い。それゆえ、言語学科で行う語学研修の学生を、他学科の教育組織でも熱意を持って受け入れてもらうためには、今後、国際交流センターを通じて交渉を積み重ねていかねばならない。

しかしそうした交渉には時間を要するため、当面は、芸術文化学部仕様のプログラムを依頼する場合、学外の施設訪問や特別講義等の課外活動を軸にするのが無理の

ないかたちだといえそうである。実際、オークランド市内には芸術系学生の訪問に適した美術館やギャラリーがある。その他周辺地域にも、芸術文化関連の施設やスポットを見出せるだろう。

ただし課外活動には懸念材料もある。(1) 施設訪問や特別講義では、未習の語彙や表現が飛び交い、内容を理解できない可能性があること、(2) 施設担当者や講演者による一方通行の話を聴くかたちとなり、英語使用機会が得られない可能性があることである。

以上の点を、本学部の前身母体である高岡短期大学の「海外研修」(米ウェスタンオレゴン大学、2003年～2005年)と比較してみよう。この研修(3週間)では、現地の英語教員(2名)とチューター学生(2名)以外すべて短期大学の学生であったため、教室内に異文化環境が生れにくかった。しかし一方では、研修プログラム自体に課外活動が頻繁に組み込まれ、学外での異文化体験の機会が設けられていた。産業博物館(織物工場を含む)やステート・フェアの訪問、スポーツ観戦、野外コンサート、隣町でのショッピング、等である。ここで重要なのは、課外活動へ出かける際、必要な語彙や情報を事前に教室で学習するカリキュラムになっていたことである。実際の運用がうまくいったかどうかはともかく、カリキュラム上、教室で学んだ語や表現を学外にある現実の場で確認したり自ら使用したりするためのお膳立てがあった。<sup>5)</sup>

この点を踏まえると、ユニテックで芸術系学生が課外活動をおこなう場合も「事前学習」の時間が欲しい。そうでなければ、学生たちは受け身のまま、施設訪問や特別講義を英語学習と関連させずに受け流してしまう可能性がある。そうした事態は避けねばならない。

ユニテックではホームステイ担当職員(ティナ・アンジェローヴァ氏)が課外活動の手配も行っている。そういう意味では「窓口」がはっきりしており、交渉もしやすいであろう。言語学科長のシャックルフォード氏からも、要望があれば連絡して欲しい旨の言葉を頂けた。本学部から学生が参加する場合は、先方との交渉により、課外活動での有効な英語使用も含めた研修環境整備を目指したい。そのため、今回の視察で得られた人的な繋がりを生かしつつ、ユニテックとの交流を積み重ねてきた杉谷キャンパスの関係教員とも連携しながら、今後、国際交流センターを通じた交渉を進めていくべきである。

なお、広い意味での課外活動としては、ホームステイ・ファミリーとの対話や交流も貴重である。ユニテックではホームステイのマッチング専門の職員が配置されているおかげで、ホームステイのケアに関する心配がない。これは大きな利点である。

## 6. 今後の課題

国際交流センターが発足し、語学研修の整備が推進されつつある現況は芸術文化学部の学生にとっても好ましいものであるが、長期的な展望に立つと課題も見えてくる。最後に、(1) 学部英語教育との関連性、(2) 新規研修先開拓の可能性、(3) 組織間交流円滑化の3点から、以下のような課題を挙げておきたい。

### (1) 学部英語教育との関連性

既に述べたように、語学研修を有意義に進めるには学部の教育に見合った現地プログラムの実施が重要である。本学部の英語教育では芸術文化的な素材を多く用いており、研修先でもそれを活かせる教育内容の提供が望ましい。

発展的な可能性として、語学研修を本学部の英語カリキュラムと関連づけることも考えられる。例えば3月期にある語学研修を1年次英語教育の総仕上げと位置づけ、学生参加を促す等である。関連する教務上の措置として、語学研修の授業化・単位化、または既存の科目による単位互換・認定、等があり得る。

しかし語学研修はあくまで大学英語教育の一部であり、本学部の英語教育は学部独自の教育方針やカリキュラムのもとで展開するのが基本である。学部で実施する英語教育の充実無しには、語学研修の授業化や単位認定への道は見えてこないだろう。このあたりが今後の課題である。

語学研修を学部教育の一環として持続させようとするれば、研修参加に足だけの学生の英語学習動機の確保や、決して安価とはいえない参加費用等、新たな問題も生じて来る。動機付け確保のためには、学部に在籍する正規留学生との交流促進等、授業以外の工夫によって学生が英語や異文化に関心を持ちやすい環境作りも必要である。参加費用については、奨学金制度充実の他、五福・杉谷キャンパスのように教員から募った「基金」を一部利用する等の措置を講じていかねばならない。<sup>6)</sup>

### (2) 新規研修先開拓の可能性

現在、本学の研修先は国別ではアメリカ2つ(マレー州立大、ハワイ大)、地域別ではポリネシア文化圏2つ(ハワイ大、ユニテック)である。これらは総じて、多民族が構築する異文化環境下、温かな雰囲気を持つ人々に囲まれリラックスして英語を学べるという好条件を備えている。他方、「西欧先進諸国」の伝統・歴史に関する知見を深め、北アメリカやポリネシアとは異質の文化・風土を体験するという意味では、ヨーロッパ地域に語学研修先を開拓する選択肢も無いわけではない。

芸術文化学部では既にイタリア、フランスを巡る「海

外研修旅行」を実施している。この研修はヨーロッパの歴史、伝統、文化、風土が体験できる好機である。この研修旅行と、アメリカ、太平洋中心の語学研修で丁度良く棲み分けがなされているとすれば、本学部としては既存の3つの語学研修制度を有効活用していくのが妥当であろう。しかし英語学習それ自体はフランスやイタリアでは無理である。その意味では、イギリスやアイルランド等、欧州英語圏での語学研修先開拓にも一考の価値はある。その場合には、欧州英語圏に詳しい関係教員の協力のもと、芸術系の教育研究プログラムを備え語学研修に力を入れている候補先機関を複数選定したうえで、現地視察を行う必要がある。また、視察の結果を元にした学部内、学内での検証により、適切な研修先があるか否かの見極めも肝要となってくる。

### (3) 組織間交流円滑化

今回の視察では国際交流センターを通して現地との連絡を取ったが、事前に要求していた事項には一切答えを貰えず、言語学科長との打ち合わせ予定1件だけの情報を基に、ほぼ飛び込みに近いかたちで乗り込んでいった。その情報に関してもニュージーランドに向け飛び立った頃に時間変更の連絡がなされ、私たちがユニテックに到着後に追加詳細情報が発信されたようで、無論確認出来たのは事後であった。「アクティブメール」を学外で使用する場合、着信音で着信をリアルタイムで確認する機能もないし、海外でのネットワーク環境も考慮していただきたいものだ。これは、こちらの事務方の責任だけではなく先方の連絡体制においても問題がありそうだ。カリキュラムの大幅改定中で多忙を極めていたことも一因と思われるが、センターのユニテック側との連絡がもう少しうまくいかないものだろうかという疑問も生じた。センターはユニテックとの連絡を経験のある杉谷キャンパスの関係教員に一部依存しているようだが、情報の混乱を避けるため、窓口を一本化して連絡をとるのが本来の在り方であり、その意味でもセンターとユニテックの連絡における責任体制を今後より明確にしてもらおうよう本学部からも要求していくべきであろう。

### 注釈

\*1 ハワイ大学マウイ校とは平成26年5月に新たに大学間交流協定が締結された。(それ以前は部局間交流協定)

\*2 ユニテックは1999年に大学への昇格を申請したが、政府の許可が下りず、果たせていない。なお、ニュージーランドの高等教育制度やユニテックについては福本みちよ「教育と労働の接続と教育の質保証——高等教育制度」青木麻衣子・佐藤

博志編著『オーストラリア・ニュージーランドの教育——グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』(東京、東信堂、2014年)を参照。

\*3 「ヨーロッパ言語共通参照枠(CEFR)」は、欧州評議会(Council of Europe)が言語教育におけるカリキュラム指針や評価基準の共通化を図るために設けた枠組みである。1980年代、ヨーロッパ地域の諸言語を保護し、発展させ、言語教育関係者の域内での交流を円滑化する研究プロジェクトが立ち上がり、その研究成果が今日のようなかたちに結実している。CEFRは言語学習者の能力評価のために6段階の基準を設けており、近年言語教育界で注目を集めている。

ニュージーランドには英語学習者能力評価の基準が複数あったが、2013年、CEFRを基に政府機関(New Zealand Qualifications Authority、通称NZQA)が新たな全国共通の統一基準を設定した。本文で触れたNZCELである。ユニテックでは2014年2月からこのNZCELを採用している。

\*4 「特に、現在の英語の広がり、母語話者よりもむしろ英語を第二言語として使用する話者と、英語を外国語として使用する話者の存在によって支えられている。このことは、必然的に、日本人が一步海外に出たときに遭遇する英語が、決して学校で学んだ「アメリカ英語」ではない確率が高い、ということの意味する。今回、5名の参加者が体験した英語も、教員以外はすべて「変種」の英語であった。急速に変容する世界の共通語としての英語の広がり、今はまだ「変種」に数えられていない外国語としての「日本英語(Japanese English)」を、インド英語やシンガポール英語のような第二言語としての「変種」の英語の地位にまで引き上げる可能性を秘めている。(「6. 引率教員の感想」「平成19(2007)年度 第2回富山大学杉谷キャンパス ニュージーランド短期英語研修プログラム 実施報告書」)

\*5 高岡短期大学の「海外研修」については「英語教育プログラムとしての海外研修——第2回ウェスタンオレゴン大学夏季英語研修報告」『高岡短期大学紀要』vol.20を参照。

\*6 現在、文科省では留学生倍増計画を進めており、「トビタテ!留学JAPAN」プログラムをおこなっている。2020年までに大学生の海外留学を12万人(現状6万人)にまで増やそうという計画だ。そうした状況下、留学を希望する学生への援助は手厚く、例えば留学に関する奨学金の条件も良くなっている。



富山大学の短期派遣留学(語学留学)では現在マーレイ州立大学のプログラムのみが日本学生支援機構の奨学金給付の対象となっている。短期の留学に対する奨学金支給額は一ヶ月8万円、マーレイ州立大学への短期派遣留学は一ヶ月以上の滞在なので16万円が給付される。

ただ、この奨学金給付条件の一つに留学で得た単位を互換しなければならないという条件がある。「6.今後の課題」で述べたとおり、単位互換・認定には課題が伴う。例えば1年生の3月に語学研修に参加し、奨学金給付を得た場合、本学部のカリキュラム上その学生は1年生の必修科目での単位認定となる。これを認めるべきか否か。もちろん、学部の英語教育を基本とするならば、必修科目での単位認定は認めるべきではない。

本学部としてはこうした課題を無視できないが、今後は、富山大学でおこなっている全ての短期派遣留学が奨学金受給の対象となるよう、取り組んでいくことが決定されている。

#### 引用文献

- 1) *Statistics New Zealand*  
<<http://www.stats.govt.nz>>
- 2) 福井英一郎編『世界地理 第11巻 オセアニア』(東京、朝倉書店、1972年)
- 3) *Unitec International Prospectus 2014*, p. 12.
- 4) 「IELTS バンドスコアの解釈について」公益財団法人日本英語検定協会ウェブサイト<<http://www.eiken.or.jp/ielts/result/pdf/interpretation-of-ielts-bandscores-j.pdf>>
- 5) *World buildings Directory Online Database*  
<<http://www.worldbuildingsdirectory.com/project.cfm?id=5116>>

#### 参考文献

1. 青木麻衣子・佐藤博志編著『オーストラリア・ニュージーランドの教育——グローバル社会を生き抜く力の育成に向けて』東京、東信堂、2014年。
2. 深谷公宣「英語教育プログラムとしての海外研修——第2回ウェスタンオレゴン大学夏季英語研修報告」『高岡短期大学紀要』(高岡短期大学)20(2005): 89-103
3. 福井英一郎編『世界地理 第11巻 オセアニア』東京、朝倉書店、1972年。
4. 「平成19(2007)年度 第2回富山大学杉谷キャンパス ニュージーランド短期英語研修プログラム実施報告書」富山大学ウェブサイト 2014年9月5

日アクセス。

<<http://www.u-toyama.ac.jp/campuslife/study-abroad/short/pdf/NZ-2007report.pdf>>

5. 「IELTS バンドスコアの解釈について」公益財団法人日本英語検定協会ウェブサイト 2014年11月25日アクセス。  
<<http://www.eiken.or.jp/ielts/result/pdf/interpretation-of-ielts-bandscores-j.pdf>>
6. “Education and Languages, Language Policy.” *Council of Europe* 4 Sep. 2014  
<[http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/CADRE1\\_EN.asp](http://www.coe.int/t/dg4/linguistic/CADRE1_EN.asp)>
7. “New Zealand Certificates in English Language and English Language unit standards.” *NZQA* 4 Sep. 2014  
<<http://www.nzqa.govt.nz/qualifications-standards/qualifications/english-language-qualifications/>>
8. *Statistics New Zealand*<<http://www.stats.govt.nz>>
9. *Unitec International Prospectus 2014*. Unitec Institute of Technology, 2013.
10. *World buildings Directory Online Database*  
<<http://www.worldbuildingsdirectory.com/project.cfm?id=5116>>